

## 道明寺古墳群発掘調査

同元氣百倍した。

この盾は、長さ一・三〇米、幅五〇釐から六〇釐で、織維で織つた上に漆で彩色し、古代芸術の特徴である三角形の幾何学的模様がはつきりと残っている。

(二) つぎに六月十一日より道明寺町道明寺の通称団栗山の発掘調査を開始した。

この古墳は、応神天皇陵と仲津姫陵の中間にある前方後円墳（全長六〇米）で、前方部が早く削り取られてあるので帆立貝式に似ているが、元來はそうでない。

六月三日は雨中、主体部と思われる後円部上で慰霊祭を行い、死者の靈をなくさめた。学校の机上を離れて実地の調査にあたる時、色々な仕事で考古学には必要であることを我々学生は感じた。

この団栗山古墳の周囲の畑は堀跡で、当時の堤がわずかに現在曲線で鼻を画する畦となつて残っている。

主体部は同じく粘土槨で、槨上に十一枚の盾を配列して、古書に見える盾なみとはこのことを云つたのかも知れない。埋葬当時は赤と黒の漆の模様が死者の威厳を表わして、当時の埋葬思想を物語るようである。

調査の都合上この古墳を盾塚と命名し、八

月三日より同古墳西側の朱金塚の発掘した。

尚、盾塚よりは多数の勾玉、管玉の玉類や銅鏡一枚、刀剣、工具等を多数発掘した。この調査中、六月廿日、廿一日の作業は、夜十一時ごろまで調査が続ぎ、夜露の中、ランプ電池の光をたよりに遺物を調査した。一同の生々とした眼は、次々に取り上げられる貴重な遺物にそそがれる。

(三) 朱金塚（円墳）は、夏期休暇を利用しての隠岐島の調査があつて末永先生は渡島されたため、研究室島田先生、阪大北野氏が指導にあたり、外形測量を進めた。

主体部は前記二基の古墳と同様式である粘土槨木棺で、この朱金塚は特に合葬の型式であつた。金玉、勾玉、管玉、ガラス玉等の玉類が無数で、まれに見る埋葬状態であつた。

(四) 八月廿五日より鞍塚（方墳）の調査に着手した。盾塚の北方にあつて、槨は粘土を用いず、礫の混つた土砂を用いているので、遺物の保存状態は悪かつたが、馬具、工具、鉢、短甲等の出土をみて、我々学生には遺物の一つが立派な研究資料となつた。

作業が夜に入ると、一面に虫の声がしきりで、テントの中での夜食のうどんの味はまた

(一) 南河内郡道明寺は、古市古墳群として考古学の貴重な資料地とされていたが、我々の参加した土師の里駅西側の高塚山古墳は、北東部に允恭陵が、南に仲津姫陵が立地して、その一線を画した中間にある。

尚、この高塚山古墳の発掘以前に駅裏の唐櫃山古墳の発掘調査が行われて、縦二・一二米、横九七釐の家型石棺が発掘された。しかもこれは底部が舟底式にすぼんで、同型のものには非常に少ないものである。

高塚山古墳調査は、五月廿八日より開始され、道明寺小学校が宿舍となつた。

高塚山古墳は、粘土槨をもつてその主体部とする小円墳で、前記御陵並びに応神天皇陵に通ずる古墳時代中期のものとわかつた。主体部の東部は盗掘されたりしく、攪乱層を六月二日の調査で認めた。同日、並びに三日に盾を出土し、先年豊中市の桜塚古墳から出土して以来学界で注目される貴重なもので、一

格別であつた。

九月一日で二カ月にわたる道明寺古墳発掘調査は終つたのであるが、これらの遺物の整理から報告書までの一貫した作業はまだ続けられている。(史学科三年勝部明生記)

## 攝州勝尾寺文書調査

応頂山勝尾寺は、大阪府三島郡豊川村勝尾山にある。西国三十三カ所第二十三番の札所に当る。伝えるところでは、聖武天皇の神亀四年(七二七)善仲、善算の二僧の開創にかり、天平神護年間、光仁天皇の皇子開成が登山して二師について受戒し、宝龜三年(七二二)大般若経書写の功を竣え、道場を建て弥勒寺と称したが、のち六世僧行巡のとき寺号を改めて勝尾寺と云つたという。名刹として古來その名は高いが、永い星霜の間には寺運の興廃もあつて、惜しいことには現存の伽藍はいずれも江戸以降の建造で、往昔の輪奐の美を見ることはできない。しかし、今なお蔵している古文書類は、平安時代より江戸

時代に至るまで、千数百通を数え、学界に尊重されるところである。そのうち六四七通はすでに昭和六年、魚澄先生らによつて「勝尾寺文書第老」として大阪府史蹟名勝天然紀念物保護調査委員会より刊行されている。

さて、調査は八月二十二日より二十四日まで二泊三日、魚澄、横田、有坂三先生の指導の下に行われた。

二十二日 午前十時、阪急箕面駅に集合したのは、魚澄、有坂二先生、史学科二年次の茨木、斉藤であつた。十時半に駅を發した一行は、町並を通りぬけて箕面の谷へかかる。箕面川は夜來の雨に水嵩を増して滔々と流れその溪谷を碧緑のうちに溶け込まんとするが如くに四方八方より覆い被さる楓樹は、周囲を風なお暗くし、幽邃の景を見せている。十一時半、有名な箕面滝に到着、茶店で休息して風食をすまず。滝から教町の急坂をのぼり、滝の上へ出ると、滝の上流に沿つて約一里、ほぼ平坦な一本道で寺に到着できる。山懐に深く抱かれた寂浄の梵刹応頂山勝尾寺は南面して建ち、街道に面した朱塗の楼門がまづ我々を迎える。參道を登つて行くと、石段の上に本堂、開山堂、般若堂、六角堂、二階堂、護摩堂、御影堂、輪藏、多宝塔等の諸堂

が建ち並び、往時の輪奐の美の名残を留めてゐる。他に応頂閣なる一画が崖に臨んで建ち一般人の宿泊の場所とされ、当時も高校、中学校の夏季学校が開かれ、相当数の生徒が泊つていた。住職小島隆光氏は一同を心よく迎えて下され、我々には特に本坊の離座敷を与えられ、幸い何の妨もなく文書に取組むことができた。御多用中をさいて来られた魚澄先生はこの日四時半に下山された。

今回は中世の寄進状のみを重点的に読むこととし、また既刊勝尾寺文書の校合をするところ、云う形で文書解説が進められた。第一日目だけに意氣正に軒昂、活字本の誤をまま見出した一同は、次々と読破して遂に勢にまかせ夜中の十二時ごろまで読み続けた。その間、蜂が襲来して大騒ぎを演じた。

翌朝は八時過起床。縁に出てガラス戸を開ければ、満々たる樹海の中に楼門の屋根がぼつかりと浮き出し、その藁は、山中のこととて遅い日の出を真向に受けて燦然と輝きや、まことにすがすがしい仏地の朝であつた。九時過より文書に取りかかった。十一時ごろ、横田先生、また四年次香田が相ついで參着。終日寄進状を読みつづけたが、しばしば難波な文書に出会い、思うようにスピードはあが